

# 薩摩半島における奈良・平安時代の 火葬墓に関する基礎的整理

竹 森 友 子

## はじめに

日本古代の葬制に関して、古墳に関する研究は枚挙にいとまないが、古墳終焉後の葬制に関しては不明な点が多い。古墳終焉後に登場した葬法として、第一に思い浮かぶのが火葬であろう。日本における火葬は、『続日本紀』文武四年（700）の僧道昭の例が文献上の初見<sup>(1)</sup>であり、火葬の風習は、釈迦の遺体を火葬したことから、仏教の流布とともに広まったと言われている<sup>(2)</sup>。鹿児島県下でも2005年時点で64の蔵骨器（火葬された骨を納めたのが蔵骨器）遺跡・出土地が報告されている<sup>(3)</sup>。ただ、火葬墓は偶然発見されることが多いため、出土状況が不明なものが多く実態がよくわかっていない。

小林義孝氏は、火葬という仏教的な葬法により葬られた場合、納棺・荼毘・拾骨・納骨・納骨施設の造営という過程を経、それぞれ何らかの儀礼の存在が考えられるとし、火葬墓から出土する遺物の出土状況の違いに注目されている<sup>(4)</sup>。

- ・ 蔵骨器の中に入っていて火を受けているもの＝荼毘に付される以前の葬送儀礼によるもの
- ・ 蔵骨器の中に入っていて受火していないもの＝拾骨の段階の儀礼に伴うもの
- ・ 納骨施設の中に蔵骨器とともに納められた遺物＝納骨の儀礼に伴うもの

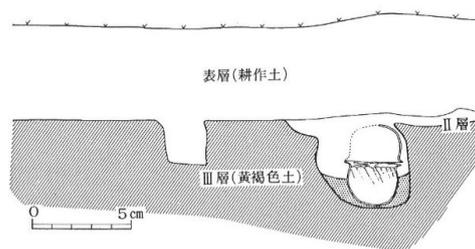
という3点である。本稿でもこの視点を取り入れ、蔵骨器出土遺跡を中心に火葬土壙墓の例も加えて分析し、奈良・平安時代の火葬墓の実態を少しでも明らかにできればと考えている。なお、鹿児島県内、なかでも蔵骨器の出土状況を知ることが出来る薩摩半島の例を分析対象としたい。

## 第1章 薩摩半島出土の古代火葬墓の概要

### 第1節 蔵骨器出土遺跡の概要

屋形原（薩摩川内市高城町屋形原）

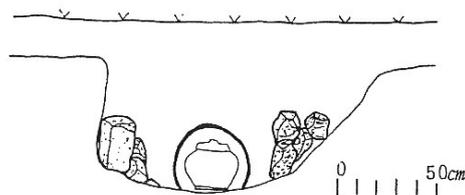
蔵骨器の出土地は、薩摩国府・国分寺より西方約1kmのシラス台地の高台に所在する。最大幅48cm、深さ44cmの土坑の中から、2個の土師器の甕を合わせ口の状態で使用した蔵骨器が出土した。土坑の下半は木炭を充填する土で被われ、上面はⅡ層（第1図参照）と同じ暗褐色土である。蔵骨器が出土した土坑の周辺からは、土師器坏や瓦器質鉢、小皿（灯明皿）などが見つかり、遺構に附属した状態ではないものの他時代の遺物の混在がないことから、葬送儀礼に伴う遺物と考えられている。



第1図 蔵骨器出土状況断面図（参考文献①より）

こえのす  
**越ノ巣火葬墓**（薩摩川内市御陵下町越ノ巣）

遺跡は屋形原の北方約300m、通称瀬ノ岡と呼ばれる標高50m前後の台地上に所在する。火葬墓は平面楕円形で、長径110cm、短径70cm、深さ40cmの掘り込みを造り、周囲を大小の石で囲んだのち、床面を整地して須恵器の壺（蔵骨器）を安置し、その上に蔵骨器を保護するために須恵器の壺を外容器として逆



第2図 火葬墓遺構復元図（参考文献②より）

さに被せていたと考えられている。（第2図参照）埋葬施設内には、多量の木炭が使用されており、蔵骨器と外容器との間や外容器と周囲を囲む石との間にも木炭が敷き詰められていた可能性がある。蔵骨器には成人男性の焼骨約840gが納められていた。また、蓋の擬宝珠形のつまみの特徴から、蔵骨器は8世紀後半のものと位置づけられている。

いちのかしら  
**市頭 A 遺跡**（始良市加治木町木田）

遺跡は、別府川と網掛川に挟まれた加治木の平野部にある。多数の柱穴や5基の土坑、6条の溝状遺構を検出した。概ね古代の遺跡と捉えられ、遺跡の性格は、周辺で検出した土壙墓や蔵骨器の出土状況から、生活の中心であった市頭 B・C 遺跡の周辺遺跡で、小規模な寺院等が存在した可能性が指摘されている。

火葬墓（もしくは土壙墓）の可能性があるのがSK2とSK6である。SK2は長軸104cm、短軸100cm、深さ23cm、底面中央部から西側に浅い掘り込みを伴う円形の土坑である。埋土はⅠ～Ⅲ層に分かれるが、Ⅱ層は黒褐色の炭化物集中土で、1～5cm大の炭化物が大量に混入している。遺物は須恵器片3点が出土したが、接合したところ宝珠形のつまみを有する蓋であることがわかった。SK6は長軸124cm、短軸44cm、深さ6cmを測る楕円形の土坑で、埋土は炭化物が多く混ざった黒褐色砂質土、中央南側から墨書のある鉢形の土師器が口縁部を東向きに倒した状態で出土した。この土師器の内部土壌を分析した結果、骨成分が混入している状況が判明した。また、この土壌を使って放射性炭素年代測定を行った結果、670～780の暦年代値を得たという。

**牧遺跡**（鹿児島市宮之浦町牧）

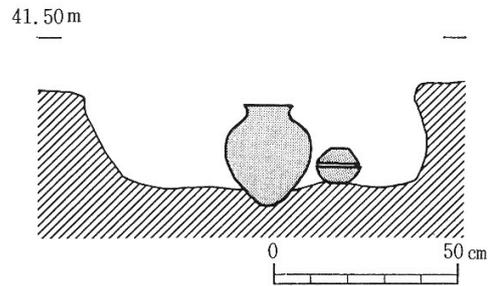
遺跡は標高380mの山地に所在している。埋葬施設は平面楕円形の長軸1m、短軸80cm、深さ60cmの土坑で、中央に須恵器の壺（蔵骨器）が置かれ、周囲には土師器の坏が蓋と身の対になって蔵骨器を巡って6カ所に配置されていた。蔵骨器には焼骨が入っており、土師器の坏が蓋として用いられていた。蓋と身の対になって供献された土師器坏のうち、身として用いられたもの6つのうち4つには「大」、1つには「祀」（もしくは「秋」<5>）の墨書が、残る1つにも部分のみで不明であるが何らかの墨書が確認されている。

**不動寺遺跡**（鹿児島市上福元町不動寺）

遺跡は谷山地区を北西から南東に流れる永田川の氾濫原右岸の標高約6～7mの扇状地上に位置する、縄文時代末～中世前期にかけての複合遺跡である。平安期（10～11世紀）の遣水遺構や池状遺構を配置した掘立柱建物群などとともに火葬墓や土壙墓が検出され、屋敷墓と考えられている。またこの時期の出土遺物としては、越州窯系青磁碗・緑釉陶器・風字二面硯や石帯（丸軻）な

どがあり、郡衙などの役所跡の可能性が指摘されている。

火葬墓は、平面やや楕円形で長軸103cm、短軸83cm、深さ約30cmの土坑で、中央部には須恵器の壺（蔵骨器）が正位に据え付けられており、中には骨片が納められていた。その壺の口縁端は意図的に打ち欠かれ、胴部には内側から穿ったとみられる3個の穿孔が存在している。土坑内からは土師器の

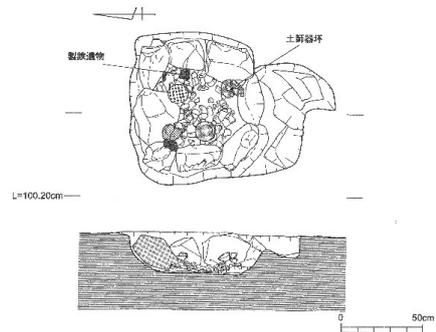


第3図 蔵骨器出土状況図（参考文献⑦の第25図を一部改変）

#### 弓場城跡（鹿児島市上福元町本町）

弓場城跡の東には千々輪城（本城）、西に支城の陣之尾城が位置し、浸食谷や空堀によって仕切られ、独立丘となっているが、この3つを谷山本城と称することもある。いわゆる中世の山城であるが、南側の傾斜変換線まで約3mのところ

で平安期の蔵骨器埋納土坑が発見された。埋葬施設は平面楕円形で長径93cm、短径83cm、深さ33cmの土坑で、土坑内のほぼ中央部に須恵器の壺（蔵骨器）を垂直に立て（正位）、東側に土師器の碗が身と蓋になって供献され（第3図参照）、刀子も見つかっている。蔵骨器の中からは、25g(6)の焼骨や蓋であったと考えられている高台付の土師器の皿が見つ



第4図 蔵骨器出土状況図（参考文献⑧より）

#### しらかしの白樫野古代火葬墓（南さつま市金峰町白川）

遺跡は標高約100mの台地上一番北側に位置する山の傾斜面で発見された。埋葬施設は平面長方形で、100cm×70cm、深さ20cmの掘り込みを造り、周囲を幅30cm前後の砂岩を組み合わせて囲んでいた。また、所々に炭化物を含んだ黒色土が充填されていたという。床面には幅5cm前後の礫が敷き詰められ、中央部には蔵骨器（土師器の壺で、仏舎利塔を思わせる三重のつまみを有する蓋が付く）が正位に置かれ、周囲を囲む石に沿うように四隅に土師器の杯が正位に置かれていた。施設内の北側に片寄って製鉄遺物が発見されている。（第4図参照）蔵骨器の中には、壮年のものとみられる焼骨1650g(7)が納められていた。

#### ほかはたの外畑遺跡（出水市荘上）

遺跡は出水平野西端の標高約15mに位置し、野田川によって形成された、河岸段丘上にある畑地帯に立地する、縄文時代・古代・中世・近世の複合遺跡である。古代では平安期の土坑6基、掘立柱建物1棟、溝状遺構1基が発見されている。土坑が9世紀前半～後半、掘立柱建物が土坑群よりは新しいがそれほど下らない時期、溝状遺構が10世紀前半～後半という年代が与えられている。床面付近の埋土に炭化物や焼土塊が含まれる、1基（SK73）を除き土師器甕の完成品あるいは大型の破片を伴う、鉄製の刀子や青銅製品を伴うものがある、などの点から、土坑群は火葬土壙墓の

可能性が高いと考えられている。

SK72とSK77の土師器甕に付着していた焼土と、SK72の床面付近の埋土のリン・カルシウム分析を行ったところ、床面付近の埋土では富化が認められなかったが、土師器甕に付着していた焼土ではリン・カルシウムの富化が認められたため、土師器甕は火葬場から墳墓まで火葬後の遺体を運ぶための容器であった可能性が指摘されている。なおSK72出土の土師器甕は、完形品が正位で据えられていることから、蔵骨器的な用いられ方の可能性も残されているという。

## 第2章 薩摩半島出土の古代火葬墓の分析

第1章で述べた遺跡の概要をまとめたのが第1表である。第1章で述べた遺跡の概要と第1表からわかることをまとめていきたい。

- ① 遺跡の立地としては、台地や山地など高台に立地するもの（1・2・4・6・7）と、平地に立地するもの（3・5・8）に分けられる。
- ② 火葬墓の存在形態としては、単独で存在するもの（1・2・4・6・7）と建物や溝状遺構、土壇墓などが同一遺跡から検出されるもの（3・5・8）がある。
- ③ 8世紀後半の可能性のある2と7で、埋葬施設の周囲を石で囲むことが行われているが、安村俊史氏の河内（大阪）における奈良・平安時代の火葬墓研究によると、石組みなどの外柵施設を伴うのは奈良時代の火葬墓が多く、平安時代になると外柵施設を有するものはほとんど認められなくなるとのことである(8)。
- ④ 埋葬施設の平面形は楕円形のものが多い（2・3<一部円形アリ>・4・5・6・8<一部円形アリ>）。
- ⑤ 埋葬施設の壁面が火化したものが見られないことから(9)、火葬地と埋葬地は別と考えられる。
- ⑥ 埋葬施設に木炭もしくは炭化物を含む黒色土が埋土とされている例が多い（2・3・4・6・7・8）。この木炭や炭化物が火葬によって生じたものかは不明であるが、炭化物入りの黒色土を埋土とする思想をうかがうことが出来る。
- ⑦ 1～8で蔵骨器中に副葬品が納められている例はない。また、埋葬施設中に副葬品がある場合でも火を受けている例はないことから、生前の愛用品を遺体とともに焼き副葬する、ということは行われていない。
- ⑧ ①②より高台に立地する火葬墓＝単独で火葬墓が存在するという結果が得られたが、5例中3例で埋葬施設中に土師器が供献され、3例とも墨書が見られた。同時期の墓制としては、土壇墓や周溝墓、石室墓が知られているが(10)、少なくとも鹿児島県内においては埋葬施設中に墨書土器が副葬された例はほとんど無く(11)、火葬墓の特徴であるといえる。
- ⑨ 蔵骨器の埋納に関しては、埋葬施設に正位で埋納されている例が多く（1?・2・4・5・6・7・8）、8以外は中央に埋納されており、埋葬施設の中央に正位で埋納するという意識があったことがうかがえる。
- ⑩ 埋葬施設から出土する土器は、土師器で完形のものが多いのに対し、8では須恵器が見られる

点と土器のほとんどが破片である点が異なっている。

なお、③以外は8世紀後半から少なくとも10世紀まで差は見られない。

以上から、奈良・平安時代の薩摩半島の火葬墓については、遺体を火葬する時に遺品も一緒に焼くことは行われず、火葬地と埋葬地は別であり、埋葬施設の平面形は楕円形で、浄化のためなのか意味はよくわからないが木炭もしくは炭化物を含む黒色土を埋土とすることで共通し、この4点は8世紀後半から少なくとも10世紀まで変化は見られないことがわかる。

	遺跡名	蔵骨器	埋葬施設	拾骨段階	納骨段階・納骨施設造営段階		墨書の文字	年代
				蔵骨器中	埋葬施設中	埋葬施設周辺		
1	屋形原	合わせ口の土師器甕	最大幅48cm、深さ44cmの土坑。土坑の底面は約25～30cmの略平坦面をもつ。	焼骨・木炭		土師器坏(2)、瓦器質鉢(1)、小皿		9C～10C頃
2	越ノ巣火葬墓	須恵器有蓋短頸壺(正位)・擬宝珠形つまみが付く須恵器の蓋。須恵器壺の外容器(倒位)	110×70cm、深さ40cmの楕円形状の掘り込みを造り、周囲を大小の石で囲む。蔵骨器と外容器の間に木炭を入れ、外容器と周囲の石の間にも木炭を敷きつめる。	焼骨(840g)=成人男性				8C後半
3①	市頭A遺跡(SK2)		104×100cm、深さ23cm、底部中央から西側に一段浅い掘り込みを伴う円形の土坑。II層が炭化物集中土			須恵器片3(宝珠形つまみを有する蓋)		8世紀後半
3②	同遺跡(SK6)	墨書のある鉢形の土師器(口縁部を東側に倒した状態)	長軸124cm短軸44cm、深さ23cmを測る土坑。埋土は炭化物が多く混ざった黒褐色砂質土				「仏廣墜」「刑部置入道平□□」	7世紀後半～8世紀後半
4	牧遺跡	須恵器壺(正位)、土師器坏の蓋	100cm×80cm、深さ60cmの楕円形の土坑。木炭片をまじえた黒色の埋土	焼骨	土坑床面中央に蔵骨器、周囲に土師器の坏が蓋と身の対になって6カ所配置		大(4)、祀?・秋?(1)	9C～10C
5	不動寺遺跡	須恵器壺(正位)、口縁部を意図的に打ち欠く。胴部に3個の穿孔	98cm×109cm、深さ30cmのやや楕円形の土坑	焼骨	中央に蔵骨器、土師器坏と緑釉陶器の皿が供献			10C～11C
6	谷山弓場城跡	須恵器壺(正位)・土師器皿の蓋	93cm×83cm、深さ33cmの楕円形の土坑。副葬品をおさめたあと木炭を含む黒土で埋め、さらに上部を黄褐色土で覆う。	焼骨(25g)	中央に蔵骨器、東側に土師器碗が身と蓋になって配置。刀子		大吉(3)	9C～10C前半(報告書は11～12C)
7	白檜野古代火葬墓	土師器壺(正位)、三重のつまみを有する土師器の蓋	100×70cmの長方形を呈する。検出面から約20cmの掘り込み中に、幅30cm前後の砂岩が周囲にうまく組み合わせられた状態で発見。炭化物混じりの黒色土が所々に充填され、床面には小礫が敷き詰められる。	焼骨(1650g)	墓坑中央部に蔵骨器、4隅に土師器坏(上向き)、北側に轡の羽口(2)・鉄滓(19)		山(4)	9C前半～10C(宮下論文では8C後半～9C初頭)
8①	外畑遺跡(SK68)		残存規模約130cm、深さ45cm。想定される平面形は歪んだ円形。床面中央の一段深くなった箇所には、黒褐色で炭化物を含んだ埋土が堆積		土師器片(84)、須恵器片(14)			9C前半～後半
8②	同遺跡(SK70)		111×90cm、深さ50cmの楕円形		土師器片(26)、須恵器片(2)、刀子(1)		不明(1) SK77出土の土師器と接合	同上
8③	同遺跡(SK72)	?土師器甕(正位)	126×95cm、深さ61cmの楕円形。土坑下部に堆積している埋土に炭化物・炭化材・焼土塊が含まれる。		土師器(76)、須恵器(6)、陶磁器類(3)、青銅製品(4)		不明(1) 土師器	同上
8④	同遺跡(SK73)		119×90cm、深さ90cmの楕円形。床面付近の埋土に微細な炭化物を含む。		土師器片(44)、須恵器(6)			同上

8⑤	同遺跡 (SK74)		115×88, 深さ35cmの歪んだ楕円形。床面付近の埋土に微細な炭化物を含む。		土師器片(31), 須恵器片(11)			同上
8⑥	同遺跡 (SK77)		120×103cm, 深さ40cmの楕円形。		土師器片(73), 須恵器片(3)			同上

第1表 薩摩半島の古代火葬墓（出土状況のわかるもの）

※3・5・8以外の年代については、「鹿児島県内の蔵骨器について」（『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書90 財部城ヶ尾遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター，2005年）の蔵骨器の年代によっている。3・5・8については報告書による。

## おわりに

最後に、小林義孝氏の示された火葬墓から出土する遺物の出土状況の違いに注目した葬送儀礼の復元という点について触れておきたい。まず、蔵骨器の中に入っていて火を受けているものは見当たらず、茶毘に付される以前の葬送儀礼は不明である。次に蔵骨器の中に入っていて、受火していないものであるが、今回紹介した例には無いが、出土状況が不明な蔵骨器中に入ったものとして小坂ノ上遺跡出土蔵骨器中＝鉄滓、礫・小石、鉄塊(12)、荒瀬出土蔵骨器中＝タカラガイ、銅製品（鑷）がある(13)。これらは拾骨の段階の儀礼に伴うものといえよう。埋葬施設の中に蔵骨器とともに納められた遺物は、屋形原・越ノ巣火葬墓以外にはみられる。これが納骨の儀礼に伴うものであるとすると、1～7と8ではかなり納骨の儀礼が異なる。8では土師器や須恵器の破片が多数出土しており、土器を破壊するという行為が行われていたことがわかるが、火葬土壙墓の特徴かどうかということは、1例しかないため不明である。

今回は薩摩半島出土の火葬墓の概要の紹介にとどまり、埋葬方法や葬送儀礼の復元には至らなかった。また火葬墓から出土する遺物の意味についても考察出来なかった。これらの点については、今後、他地域の例なども分析の対象に加え、明らかにできればと考えている。

## 主要参考文献

第1章で取り上げた遺跡の概要・第1表の内容については以下による。

### 屋形原

- ① 新東晃一・牛ノ濱修・長野真一「川内市高城町字屋形原発見の蔵骨器」（『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(2) 放光寺遺跡』鹿児島県教育委員会，1976年）

### 越ノ巣火葬墓

- ② 「越ノ巣火葬墓」（『先史・古代の鹿児島 資料編』鹿児島県教育委員会，2005年）

### 市頭A遺跡

- ③ 『始良市埋蔵文化財発掘調査報告書4 市頭A遺跡 市頭B・C遺跡』（始良市教育委員会，2013年）

### 牧遺跡

- ④ 「牧遺跡」（『吉田町郷土誌』吉田町郷土誌編纂委員会，1991年）

### 不動寺遺跡

- ⑤ 有川孝行「不動寺遺跡2008年度の調査」（2009年5月9日鹿児島考古談話会報告レジュメ）

⑥ 有川孝行「鹿児島市不動寺遺跡」(2014年8月26日古代史サマーセミナー配布資料)

弓場城跡

⑦ 『鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書11 谷山弓場城跡』(鹿児島市教育委員会, 1992年)

白樫野火葬墓

⑧ 宮下貴浩「白樫野古代火葬墓と鉄製遺物」(『鹿児島考古』第34号, 2000年)

外畑遺跡

⑨ 『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告第125集 外畑遺跡』(鹿児島県埋蔵文化財センター, 2012年)

注

- (1) 6世紀後半～7世紀後半においても古墳の内部で火葬をした跡をうかがわせる施設が見つかっており(『仏教文化の伝来－薩摩国分寺への道』鹿児島県歴史資料センター黎明館, 1990年), 文武四年以前から火葬の存在は確認できる。
- (2) 注(1)に同じ。
- (3) 松田朝由・上床真・松尾勉・長野真一・野間口勇「鹿児島県内の蔵骨器について」(『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書90 財部城ヶ尾遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター, 2005年)
- (4) 小林義孝「葬送儀礼における銭貨(1)」(『歴史民俗学』第7号, 1997年)
- (5) 注(3)に同じ。
- (6) 小片丘彦・峰和治・竹中正巳「弓場城跡出土の蔵骨器内火葬骨について」(『鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書11 谷山弓場城跡』<鹿児島市教育委員会, 1992年>)
- (7) 宮下貴浩「白樫野古代火葬墓と鉄製遺物」(『鹿児島考古』第34号, 2000年)
- (8) 安村俊史「河内における奈良・平安時代の火葬墓」(堅田直先生古希記念論文集刊行会編『堅田直先生古希記念論文集』真陽社, 1997年)
- (9) 安村俊史氏は, 火葬地か否かの判断は, 土坑壁面が火化されているか否かを基準とすべきであるとされる。(注<8>に同じ)
- (10) 上床真「さまざまな墓」(『先史・古代の鹿児島 通史編』鹿児島県教育委員会, 2005年)
- (11) 祓川地下式横穴墓群の2号土坑から出土した土師器杯の外面に「門」に似た字が墨書されており, 土坑については問題点が多いが, とされるものの, 地下式横穴墓の可能性が指摘されている。(『鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書83 薬師堂の古墳 祓川地下式横穴墓群』鹿屋市教育委員会, 2007年)
- (12) 上田耕「石坂上遺跡発見の須恵器壺」(『ミュージアム知覧』第7号, 2001年)
- (13) 三島格「鐻及びタカラガイ副葬の蔵骨器について—薩摩大口市, 伊佐郡における蔵骨器諸例—」(『貝をめぐる考古学』学生社, 1977年)

(たけもり ともこ 本館資料調査編集員)